

EBウイルス感染症 (伝染性単核球症)

★伝染性単核球症とは

耳慣れない病名ですが、Epstein-Barr virus (EBウイルス) の感染によって起こる病気です。乳幼児期の感染の場合、多くは知らないうちにかかっている不顕性感染の形をとり、2～3歳頃までに70～80%の人が感染しています。しかし小学生以降に感染すると症状を呈することが多くなります。通常は予後良好で自然治癒しますが、まれには肝機能障害が長引いたり、重症な合併症を伴うことがあります。感染してから発症するまでの潜伏期間は4～6週間といわれています。唾液中のウイルスが感染して起きるため、思春期以降の場合キスをきっかけに発症することが多く、kissing disease (キス病) などと呼ばれています。

EBウイルスは人の体の中に潜伏し持続感染し、人の免疫状態が弱くなると再活性化してリンパ腫や癌などの様々な病気を発症させるといわれています。一方で、明らかな免疫異常がない場合でもEBウイルスが持続的に感染して「慢性活動性EBウイルス感染症」と呼ばれる病気を起こすこともあります。

★症状

1. **高熱**・・・数日間あるいは時には1週間以上も続く高熱があります。
2. **咽頭炎、扁桃炎**・・・のどの痛み、物を飲み込むときの痛みがあります。扁桃に白い白苔(うみ)が付くことが多くみられます。
3. **リンパ節腫大**・・・首、わき、股のリンパ節が腫れます。特に首のリンパ節は鶏卵くらいになることがあります。
4. **肝臓や脾臓の腫大**・・・多くの例で見られます。肝機能障害も見られます。
5. **その他**・・・全身に発疹が出たり、目の周りがむくんだりすることもあります。また、年長児では全身倦怠感や食欲不振を訴えることが多くみられます。

合併症としては、まれですが髄膜炎などの中枢神経合併症、血球貪食症候群、脾破裂、心筋炎や心膜炎、肝不全などがあります。

★診断

診断は上記の臨床症状に加えて、特徴的な血液像(リンパ球の増加や異型リンパ球の増加)やEBウイルスの血清抗体価によって診断します。

典型的な症状があったり特徴的な血液像がみられれば容易に診断できますが、乳幼児の場合には症状が乏しい場合が多く、診断するのが難しくなります。

★治療および看護

原因のEBウイルスに効く薬はありません。高熱に対する解熱剤や脱水症に対する点滴などの対症療法が基本となります。「子どもの発熱について」などのパンフレットを参考にしてください。ただし、重症の場合にはステロイド剤を使用することがあります。抗生物質は必要なく、特にペニシリン系の抗生物質は発疹を誘発することがあるので注意が必要です。

保育所・幼稚園や学校には、熱が下がって状態が回復し医師の許可が出てから行くようにしましょう。一度感染すると唾液中にウイルスが排出されますが、「突発性発疹」と同じ扱いでよく、隔離する必要はありません。